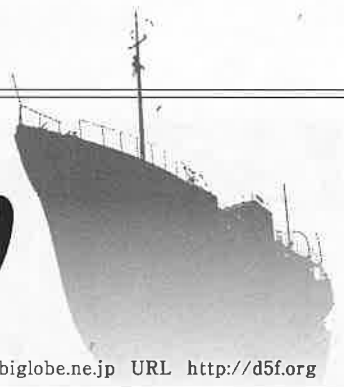


福竜丸だより



気持ち

清水千郷

学校で冊子が配られた

ロンゲラップの海*

ページを開いてひと通り 目を通した

アメリカが行った 水爆実験

木造船の前で 話を聞いた

大石さんは か細い声で当時のことを

話してくれた

今 どういう感情なんだろう

どんな思いで私たちに話してくれてるんだ

ろう

苦しい

木造船のまわりを一周した

「第五福竜丸」

目につく字で書かれた 立派な船だと

私は思った

かべにはいくつかの写真

そこには 父を亡くした家族が写ってる

福島も同じ現状

家族を亡くし

家をなくし

大切なものをなくした

でも

上を向いてる人がいる

下を向いてる人なんか

いない

だれになにを言われようと

必死に 必死になって

失われたものを とりもどそうとして

いる

原子力に 負けたくない

私だって福島県民だ

負けたくない

絶対に



昨年、修学旅行で展示館を訪れた、福島県西会津町立西会津中学校
3年生の「修学旅行文集」より転載しました。

*ロンゲラップの海…石川逸子の詩集『ロンゲラップの海』
マーシャル諸島ロンゲラップ環礁は、第五福竜丸同様核実験の「死の灰」が島
に降りそそぎ、人もほかの生き物も被曝。島の人々は、アメリカによる「安全
宣言」を受けて帰島しましたが、1985年、子どもたちの未来のために、と島
を離れる選択をしました。

核・被ばくなき世界を希い

公益財団法人第五福竜丸平和協会

代表理事 川崎昭一郎

明けましておめでとうござ
います。皆様のご多幸とご発
展を心からお祈り申し上げま
す。

野から多数来館されると期待
されます。

昨年は三月一日の東日本
大震災、津波、福島原発事故で、
なかならず核放射能の問題が
改めて世間の大きな注目を浴
びました。

公益財団法人第五福竜丸平
和協会では役員、ボランテ
ィア一同、関連する科学問題
についての基礎知識をしまか
りと身につけて臨まなければ
ならないと考えております。

本年五月に沖縄県名護市で、

第六回太平洋・島サミット（P
ALM6）が開催されます。

太平洋島嶼国・地域が直面
する種々の問題について首脳
レベルで意見交換する場で、
政府は日本と島嶼国との関係
を密にするため重視しており
ます。

ピキニ環礁やマーシャル諸
島が注目される機会となるで
しょう。

当法人にはこれら地域の現
地調査・研究に長く携わって
こられた専門家が何人かおり、
本年久しぶり現地を訪ねてみ

たいという動きもあります。

できれば、三月一日前後に事
務局、ボランティアからも参
加した現地調査団を送れない
ものかと考えております。

アジア太平洋地域はいま世
界で最も成長著しい地域とし
て注目を浴びており、これら
島嶼地域はその真中にありま
す。

新年に当たり私ども一同決
意を新たに当法人と第五
福竜丸展示館の更なる発展に
努める所存です。皆様のご支
援ご鞭撻をお願いする次第で
す。

」に参加したことが契機

となり、ラッキードラゴン
作品と絵本を制作。「サン・
チャイルド」はその延長線
上に、福島原発事故に触発
された新しい作品です。

○企画展「マーシャルの人々
はいま」（6月～12月）

ピキニ水爆実験から58年、
ロンゲラップ住民は、今年中
に一部帰島する計画がありま
す。そこで、二月下旬から三
月始めにかけて計画されるフ
ォトジャーナリスト島田興生
さん（第五福竜丸平和協会専
門委員）の取材行に同道し、
第五福竜丸平和協会としても
調査と被ばく者との交流をお
こないます。

最新の情報と島の人々の表
情を伝え展示する企画展をお
こないます。

◆被爆ピアノ・コンサート

広島で被爆したピアノを五
月中旬に東京に招聘する動き
があり、第五福竜丸展示館で
もこのピアノを活用したコン
サートの企画が検討されてい
ます。広島長崎、第五福竜丸・
ピキニ事件、福島をつなぐ「命
と平和への希い」を紡ぐコン
サート企画です。



2012年の企画より

◆3・1ピキニ記念のついで

◆3・1ピキニ記念のついで

◆3・1ピキニ記念のついで

◆3・1ピキニ記念のついで

◆3・1ピキニ記念のついで

◆3・1ピキニ記念のついで

◆3・1ピキニ記念のついで

◆3・1ピキニ記念のついで

今年、第五福竜丸被災58
年、建造65年にあたります。
東日本大震災と福島原発事故
は、あらためて第五福竜丸被
災とピキニ事件がもたらせた
半世紀以上前の放射能禍への
再認識をひろげました。こう
した状況とも結びながら第五
福竜丸の航海をすすめます。

また、二〇一四年の第五福
竜丸被災60年にむけて、記念
事業のプロジェクトを検討し
ます。

○企画展「ヤノベケンジ」サン・
チャイルド」放射線の不安な
き世界を生きる未来の子ども

○企画展「ヤノベケンジ」サン・
チャイルド」放射線の不安な
き世界を生きる未来の子ども

大石さんの怒りと誇り

—ブックレットを書き上げて

小沢 節子

昨秋、『第五福竜丸から「3・11」後へ—被爆者大石又七の旅路』(岩波ブックレット)という小さな本を出した。限られた枚数だったが、大石さんという個人の評伝を通して、広島・長崎の原爆被害から福島の原発事故までの核をめぐる歴史が立体的に見えて

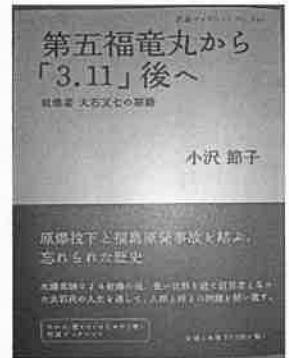


第五福竜丸展示館で語る大石さん

くるように心がけたつもりだ。とはいえ、震災と原発事故がなければ、その一週間前に大石さんにお会いして「私たちはだれもが被ばく者になる世界を生きている」という言葉を聞いていなければ、そして旧知の編集者から声をかけていただかなければ、この本が生まれることはなかったと思う。その意味では自分の意志というよりは、これもまた、大きな歴史とささやかな「ひとりの私」の人生の歯車が噛み合わさった偶然の産物かもしれない。

*

本を書く過程でひととき印象深かったのは、やはり大石さんの「怒り」だ。今回の原発事故以降、大石さんは、放射線の危険を国民に知らせないまま原子力政策を推進してきた日本政府、いわば「核権力」への批判を強めている。



半年に及んだインタビューでも、自分は「運動」をしているのではない、「怒り」で動いてきたのだ」と何度も強調された。特定の政治的組織や団体に属することなく、趣旨に賛同すれば、どこにでも一人で出かけて話をするのは「怒り」が自分を駆り立てているからだともおっしゃる。

大石さんは「義憤」とか「公憤」という言葉がふさわしい「まっとうな怒り」を抱きつけているのだが、当初、私にはその意味がいまひとつ、よく理解できずにいた。頭では、大石さんの怒りの対象は、個人の存在を押しつぶす「権力」であり、庶民の中にもある差別意識や、金が生み出す妬み・そねみといった精神の負の部分でありと、次々と「答え」は浮かんで来たと、実際、そうしたことは本にも書いた。ただ、ひとは、どう

したら「怒りを生き続ける」ことができるのだろうか。やがて、大石さんの怒りは決して彼の人生を消耗するものではなく、むしろ、自らの人生を支えるために、きわめて意識的に形作られていった感情であることに気づいた。

*

大石さんの怒りの正当性を担保するものは—言葉が適切かどうかはわからないが—やはり、大石さんの「誇り」、自分自身の尊厳を信じる思いである。そうした思いを大石さんは、ある時点から自覚的に「言葉」とする努力を重ねていったのだ。大石さんは、しばしば、「自分は中学校中退の無学な漁師に過ぎないから」とおっしゃるが、決して自分を卑下しているのではなく、謙虚な慎ましい自己認識は自分の人生のかけがえのないさに対する誇りでもある。ピ

キニ事件(とその後の日米両政府による事件の「政治決着」)は、二〇歳の大石さんの未来を奪っただけではない、一四歳のときから必死になつて働き、生きてきたひとの、人間としての誇りを損な

ったのだ。

文字の世界とは無縁に暮らしてきた大石さんは、五〇歳を前にしてエクリチュール(書き言葉)の世界へと足を踏み入れていき、自らを苦しめてきた生(なま)の怒り、自己の尊厳が侵されつづけてきたという感情を文字で表現するようになる。被爆体験を綴り、自分の人生の中に位置づける作業を経て、大石さんは自分が何者として語るのかという問いに直面し、被爆者という主体、当事者性を立ち上げていく。

大石さんの旅路をたどることで、私は、表現(言葉)を獲得することと人が何者かになることは、離れがたく結びついていくのだという当たり前の認識に立ち返り、奪われた誇りをとりもどそうとする人の怒りについて考えるようになった。ひるがえって、「3・11」以後の現実の中で、私たちは、どれだけ、まっとうな怒りを持続しうるのか。本を書き終わっても、大石さんから投げかけられた問いはつづく。(こざわ せつこ/早稲田大学講師)

沼田鈴子さんの遺志と語りつぎ部

広岩近広

毎日新聞に「記者の目」というコラムがある。この欄で、ヒロシマの語り部・沼田鈴子さんを紹介して、「語り部の決意に応えよう」と訴えたのは〇五年の暮れだった。

この年の春、沼田さんは整形外科病棟のベッド上で、ひとまわり小さくなった体を横たえていた。被爆六〇年を迎える原爆の日を前に思うよう

に証言活動ができないもどかしさと、健康や将来に対する懸念がにじんだ表情だった。

夏が去り、秋風が吹く頃、沼田さんは介護付の有料老人ホームに転居した。広島市南区のホームを訪ねたとき、広い空間があるのに驚いた。衣装や家具を極力減らしているのが見て取れた。

「先日、埼玉県から小中高



在りし日の沼田鈴子さん（92年5月）

の代表が平和学習に来たんよ。これからは、この部屋で被爆体験を話すからね」
そう話す沼田さんの決意に胸をうたれ、「記者の目」に書いた。〈対面式で聞く証言に勝るものはないと思う。沼田さんと子どもらの感動

的な出合いを、この目で見た私の確信である。しかし沼田さんにかぎらず、この世から原爆による被爆者がいなくなる日がそこまできている。直接、証言を聞ける時間は極めて少ないのだ。

だから被爆者の思いに伝える支援が必要だと訴えたのだが、もはや沼田鈴子さんから対話式で証言を聞くことはできない。沼田さんは昨年七月一二日朝、心不全で永眠した。三月一日に起きた東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故が、沼田さんの寿命を縮めたと思っている。

チェルノブイリ原発事故（八六年四月）の放射線被害者に心を痛めた沼田さんは、支援活動を続けていた。日本で原発事故が起きない保障はなく、いったん起きたら取り返しがつかない……。ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ（五四年三月の第五福竜丸事件）、チェルノブイリと見てきた沼田さんは、核放射線の正体がわかっていった。故森滝市郎・広島大名誉教授の遺言ともいえる「核と人類は共存しない」を心に深く刻んで語り続け

た。

それだけにフクシマが沼田さんに与えた衝撃は想像を超える。眠れない日が続き、心拍数は高まり、食事ができなくなり、広島市内の病院に搬送された。旅立たれる6日前にお会いしたとき、もう声を出せなかった。沼田さんの目は、元気になるよ、福島の子どもたちが心配だからね、と語りかけているようだった。あるいは、あとは頼んだからね、と遺したのだろうか。強い視線だった。

それから四カ月後、元広島原爆資料館長の高橋昭博さんが亡くなった。ローマ法王ヨハネ・パウロ2世を資料館に案内した折、ケロイドでただれた腕をまくり上げて見せている。法王は至言を残した。「広島を考えることは、核戦争を拒否することです。広島を考えることは、平和に對して責任をとることです」
高橋さんは海外の要人にヒロシマを伝えた。お会いするたびに熱気を感じた。オバマ米大統領の広島訪問を待ち望み、何度も手紙を書いていた。悔しいかな、オバマ大統領が

対面式で高橋さんから話を聞くことはできない。

対面式で証言に耳を傾ける強さは、ビキニ事件を語り続ける大石又七さんも同じである。当時のまま保存されている第五福竜丸の前で、大石さんの体験を聞く学生たちの顔つきが真剣になつていくのを、そばで見たときの感動は忘れられない。

大石さんの語る姿を何度も目に焼き付け、自ずと耳に残している第五福竜丸展示館の学芸員、市田真理さんは著書「ポケットのなかの平和 わたしの語りつぎ部宣言」（平和文化）で書いている。

〈人類が共有すべき記憶とは、人びとの口を介して紡ぐもの、織りなすもの。検証して、つないでいくもの。だから、「語りつぎ部」宣言〉。
来るべき時代を見すえた宣言だろう。沼田鈴子さんが逝った今、私は沼田さんが語る姿を、その声を、胸に刻みつけている。市田さんにならえば、「だから、沼田鈴子さんの語りつぎ部宣言」である。（ひろいわ ちかひろ／毎日新聞専門編集委員、写真も）

わたしとビキニ事件 —— 女子学生が集めた千羽鶴

折井美耶子

今から五〇年以上も前のこと、細かい記憶はさだかでは
ありませんが、思い出すままに
綴って見ます。私の今日の原点
の一つは、ビキニ・第五福竜丸
事件にあるといつても言い過
ぎではないと思います。

当時私は静岡大学文理学
部の学生でした。この文理学
部は旧制静岡高校が新学制に
よって昇格したもので、男子
校だった旧制高校には当然な
がら女子向けの設備はほとん
どありませんでした。女子学
生の数も少なかったのですが、
体育のための更衣室もなく、
寄宿舎もありませんでした。
それだけでなく女子学生を取
り巻く問題は多々ありました
ので、「友情と団結のために立
場をこえて話しあおう」をス
ローガンに、奈良女子大で全
日本女子学生大会が開かれた
のは一九五三年二月でした。
私たちの学部でも「女子学生
の会」ができて、大学にいろ

いろの要求を出していました。

第二回はお茶の水女子大学
で、私はこの大会に参加い
たしました。要求で一番大き
かったのは女子寮です。少人
数の女子のために寮を作る予
算はないということで、みん
なで力を合わせて古い大きな
空家を見つけて大学と交渉
し、そこを共同管理の女子寮
としました。協力的だった当
時の学部長は、あの映画『日
本の青空』の主人公となった
鈴木安蔵先生でした。私たち
はその寮に「太陽荘」という
名前をつけました。あの平塚
らいてうの「元始、女性は大
陽であった」からです。

一九五四年三月一日、焼津
の漁船第五福竜丸が被爆し
た事件は一四日に帰港したこ
ろから大きな問題となりまし
た。焼津は静岡の隣の港町、
新鮮な魚や名物の黒はんぺん
(地元では「はんべ」といい

ます)をおばさんたちがよく
売りに来ていました。その魚
が放射能に汚染されたとい
うのです。

三月二七日、焼津市議会が
原水爆禁止の決議をしたのを
皮切りに全国で原水爆禁止の
署名運動が始まりました。地
元静岡県でも自発的な署名運
動が始まり、福竜丸の乗組員
を出している村では同級生や
婦人会が運動を展開、三週間
で村人口の三分の一の署名を
集めたといわれています。

放射能の測定は、大学の塩
川先生たちが「ガイガー計数
器」を担いで焼津に行き、港
に並べられているマグロなど
を調べていました。放射能に
汚染された魚は「ガーガー」
という無気味な音がしたので
記憶しています。

私たち学生も署名運動をは
じめましたが、当時の学生た
ちは平和運動に積極的でした。

女子学生の会では「千羽鶴
を集めましょう」ということ
になり、焼津の町に出かけま
した。焼津の町は被爆で大騒
ぎと思いきや、商売が大打撃
をうけてひっそりと静まりか
えっていました。その町中を

女子学生が手分けして一軒一
軒訪ねて歩きました。手にもつ
たのは鶴を折ってもらう紙で
すが、売っている折り紙では
なくて、みんなが持ちよって
正方形に切ったデパートなど
の包装紙でした。折り紙を大
量に買うお金がなくてみんな
で包装紙を持ちよったのです。
当時の学生は貧乏でした。訪
ねた先にその紙を渡して「白
い裏に願いを書いて鶴に折っ
て下さい。またそれをいただ
きに参りますから」と言って
歩きました。若い女性たちだっ
たからでしょうか。嫌な顔を
されることもなく受け入れて
くれて、次に行った時には鶴
をもらうことができました。

集まった鶴を糸でつない
で千羽鶴として、その年の五
月に明治大学で行われた全日
本学生平和会議に私ともう一
人の女子学生が代表となって
持って行きました。広い大講
堂に学生たちがぎっしり申し
ました。主催者に趣旨を話して鶴
を渡すだけと思ったのです
が、壇上で話すように言われ
てしまい、やむなく挨拶をし
ましたが何を話したか覚えて

いません。しかし記念に鳩の
バッジを貰いました。このこ
とはすっかり忘れていたので
すが、あるとき古い『婦人公
論』を見ていたら、昭和三〇
年八月号が「戦後十年女性の
「歩み」となっていて、「年表」
がついていました。その昭和
二九年に「5 全国学生平和
会議、静岡大学の女子学生は、
平和への祈りを千羽鶴にこめ
て持ってくる」と記されてい
てびっくりしました。

このビキニ被爆事件がきつ
かけとなって、原水爆禁止
世界大会と日本母親大会がは
じまったことは、よく知られ
ていますが、女子学生の会で
はとくに母親大会開催にむけ
ての活動のお手伝いをしまし
た。財政活動として「母親手
拭」をたくさん売りました。
平塚らいてうの揮毫の「世界
中のお母さん、手をつなぎま
しょう」と、日本画家の堀文
子が描いた可愛い子どもの絵
が藍色で染め抜かれた手拭で
す。その時の一本を今も私は
大事にとってあり、これは私
の大切な宝物です。
(おりい みやこ／女性史研究
者)

連載⑫

晴れた日に
雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

第五福竜丸平和協会の事業の第一は第五福竜丸船体保存の実現でしたが、船の保存にあわせて、二つの事業に取り組みました。一つは前号で紹介した『ビキニ水爆被災資料集』の刊行でしたが、もう一つは、故久保山愛吉さんの「記念碑」の建立でした。

建立は、独自の募金計画で進められ、七六年六月一〇日の第五福竜丸展示館開館に先立つ五月二九日に除幕されました。展示館前庭に建立された「久保山愛吉記念碑」は、高さ二メートルの根府川石。

「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい 久保山愛吉」のことが刻まれました。揮毫は協会初代会長の

三宅泰雄さんです。この碑文について専務理事だった広田重道さんが書いています。久保山さんが残したことばには「何通りかの言葉遣いがあり、それらから、碑に刻まれたことばを、久保山さんの枕辺で耳にした壬生照順さんなどに確かめ、この表現に落ち着いたというのです。壬生さんは、第五福竜丸保存の呼びかけ人、保存委員会の代表委員に就かれますが、福竜丸被災直後の四月に東京などで開かれた「世界平和者日本会議」代表として、久保山さんや乗組員を見舞ったのでした。

た。

*

愛吉さんは、きびしい治療に耐えつつこんな言葉を繰り返して語りかけたといひます。

「俺たちのように苦しい思いをする人間を再び出すようなことがあつたら絶対許さない」「一人でも犠牲者を出さうなことがあつたら、俺はただではおかない」

「原水爆の被害者は俺たちだけでたくさんだ。俺たちで終わりにしてもらいたい」
——すすさんから聞き取り

をした飯塚利弘さんが記していることです（『死の灰を越えて—久保山すすさんの道』）。

大石又七さんが記していることも紹介しておきましょう。大石さんは久保山さんとベッドが隣り合っていました。八月中ごろ、久保山さんの意識が混濁し、日ごろの穏やかさに似合わない激しい声を何度も聞いたと言います。

この「怒りの叫びは、少しづつニュアンスを変えて語られ、書かれ、（そして）へ原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」という、やわらかな表現になっていった。——大石さんの思いがこもる記述です。

久保山さんの昏睡は、一時、覚めたものの、九月二三日、みんなで焼津に帰ろうとの願いを無常に打ち切ったのです。「へ愛吉約束が違う、違うじゃないか」母親しゅんさんのかすれた声がいっそうの哀れを誘いました（大石又七『ビキニ事件の真実』）。

*

第五福竜丸をはじめ、漁船が持ち帰る漁獲物から放射能が検出され、やがて放射能雨

が日本全土に降りつづき、日本列島は「原爆マグロ」と「死の灰」の恐怖と不安に置かれるのです。

原水爆禁止の声は、堰を切つて落とすように流れ始めます。それは、広島・長崎への原爆投下以来、日本国民が原爆の恐るべき惨禍、その苦しみを耐えてきた国民感情の奔流でした。

「連日報道される久保山さんの病状の一進一退、その状況をうつしたように原水爆禁止署名の集約がすすんだ」八月八日結成された署名運動全国協議会の報告が述べていることです。

*

「これを見よ全世界のいちにんのわたくしごとの死にはあらぬを」

久保山さんに捧ぐ」と題詠された中原綾子さんの短歌です。

「いちにんのわたくしごとの死にはあらぬ」久保山愛吉さんの死は、日本国民の心を大きくゆすりました。それは、容易に、広島・長崎の悲惨、ひいては戦争の体験に通底するものでした。

翌年八月、三〇〇万人を

越えた原水爆禁止署名、世論を背景に原水爆禁止世界大会が広島で開かれます。この大会や七月の日本母親大会に「水爆犠牲者未亡人」すすさんは招かれ、話しました。控え目なすすさんを後押ししたのは「原水爆を一日も早くなくしてほしい」と言い続けた愛吉さんの遺志でした。こんなことも話しました。アメリカの女性から、お見舞いにか贈りたいという申し出がありました。すすさんはお礼の手紙にこう記します。ほしいものはありません。できるなら、子どもとわたし達の前に「愛吉を返してほしい」。

*

「いちにんのわたくしごとの死にはあらぬ」久保山さんの遺した「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」のことばは、ヒロシマ・ナガサキの死者の思いを体し、「ふたたび被爆者つくるな核兵器なくせ」の対語に結び、日本国民への、全世界の人々への呼びかけであり続けるのです。（やまむら しげお／第五福竜丸平和協会顧問）

第五福竜丸で 若者たちと向き合って…

—ボランティア活動のなかから—

竹井みよ子

からなかつたが、今は違う見方ができます」と言っていた青年がいました。

震災以後、来館される方の意識が高くなり展示の見かたも深くなった感じがします。この間、修学旅行で来た会津の中学生が大石さんのお話を真剣に聞いていました。その後で一人の生徒が大石さんの本を買い、アンケートに「今度は家族と来たい」と記していきました。南相馬市から会津に避難して、お父さんは単身赴任とのこと、素朴な感じの少年で、心に響くものがありました。

研修ツアーを実施

ボランティアの会では年に



ボランティアの主な仕事は来館者へのガイドです。小学生やおとなの団体に、二〇分位の説明をします。話す内容は同じでも、話し方は聞く人に合わせて工夫します。子どもたちに話す時は、今すぐ全部理解できなくても、ひとつでも心に残ることがあればと思います。
おとなになつてから再び来館される方もいます。いつだったか「子どもの時はよくわ

一度外へ研修にでかけます。今年は一月二三日に川崎市にある岡本太郎美術館と日本民家園へ行ってきました。

民家園では、江戸時代から昭和初期にかけて建造された農村や漁村の住宅、舞台等を文化財保存の専門家、日塔和彦さんのお話をうかがいながら見てまわりました(写真)。

住宅の細部に至るまでその地方の気候や生活に合わせた工夫が施されているのがわかりました。自然の素材を巧みに生かした家や、中に置いてある道具等から、昔の人の暮らしが偲ばれました。これらの貴重な文化遺産を長く保存していくためにさまざまな見えない努力がされているとのこと、それは船についても同じなのでしよう。

展示館に実物の船があると、いうことが、私の拙い話を助けてくれます。船が伝えているのは、乗組員やその時代に生きた人々の心だからです。微力な私ですが、これからもこの船の下で語り継いでいきたいと思えます。

(たけい みよこ／第五福竜丸展示館ボランティアの会)

広島語り部、高橋昭博さんのこと

広島で被爆し、元広島平和記念資料館長、日本被団協代表理事などを歴任された高橋昭博さんが、一月二日に亡くなりました。八〇歳でした。高橋さんは戦後、市職員となり、また被爆者運動、語り部活動を熱心におこないました。原爆ドームの保存を担当し、ローマ法王来広時には資料館見学の案内をしました。

第五福竜丸の保存運動にも賛意を示し、武藤宏一さんの朝日新聞投書「沈めてよいか第五福竜丸」に共鳴して武藤さんとの文通を重ねました。展示館では二〇〇八年秋に開催した「原爆ドームと第五福竜丸展」に際して、ドームの保存のとりくみや武藤さんとの交流について広島でお話をうかがいました。

記録映画

『世界は恐怖する』

連続上映会・アートスペースKEN

世界は恐怖する

死の灰の正体

監督 亀井文夫

原爆資料館蔵 広島県立美術館蔵

The World is Terrified

AGAMA

2011.12/11(日)、12/18(日)、12/23(金) 2012.1/13(金)、1/15(日)、1/20(金)、1/22(日)、1/27(金) 2/5(日)、2/10(金)
Friday-20:00~/Sunday-18:00~
入場料 大人1000円 / 中学生以下500円
チケット 広島県立美術館
http://www.kenawazu.com/events

亀井文夫監督の『世界は恐怖する』(死の灰の正体)の連続上映会が2月まで行われています。世田谷・三軒茶屋のアートスペースKENとの共催です。ビキニ事件以来のさまざまな放射能測定を記録した貴重なドキュメンタリーで、山村茂雄顧問、安田事務局長、市田学芸員が交替で解説します。2月10日まで。上映日程等詳細はウェブサイトをご覧ください。
<http://www.kenawazu.com/events>

パグウォッシュ会議会長が見学



現パグウォッシュ会議の会長で元国連事務次長のジャヤンタ・ダナバラさんが11月12日に来館しました。

ダナバラさんは、ピースボートの案内で展示館を訪れ、川崎昭一郎代表理事の説明を受けながら見学しました。

学生時代に第五福竜丸の被災について学んだというダナバラさんは、熱心に展示に見入り、第五福竜丸の歴史や久保山愛吉さんの言葉に感銘を深めた様子でした。多くの学生が訪れるとの説明に、船を保存し伝え続ける重要性について感銘を受けたと語りました。

太平洋・島サミット開催される

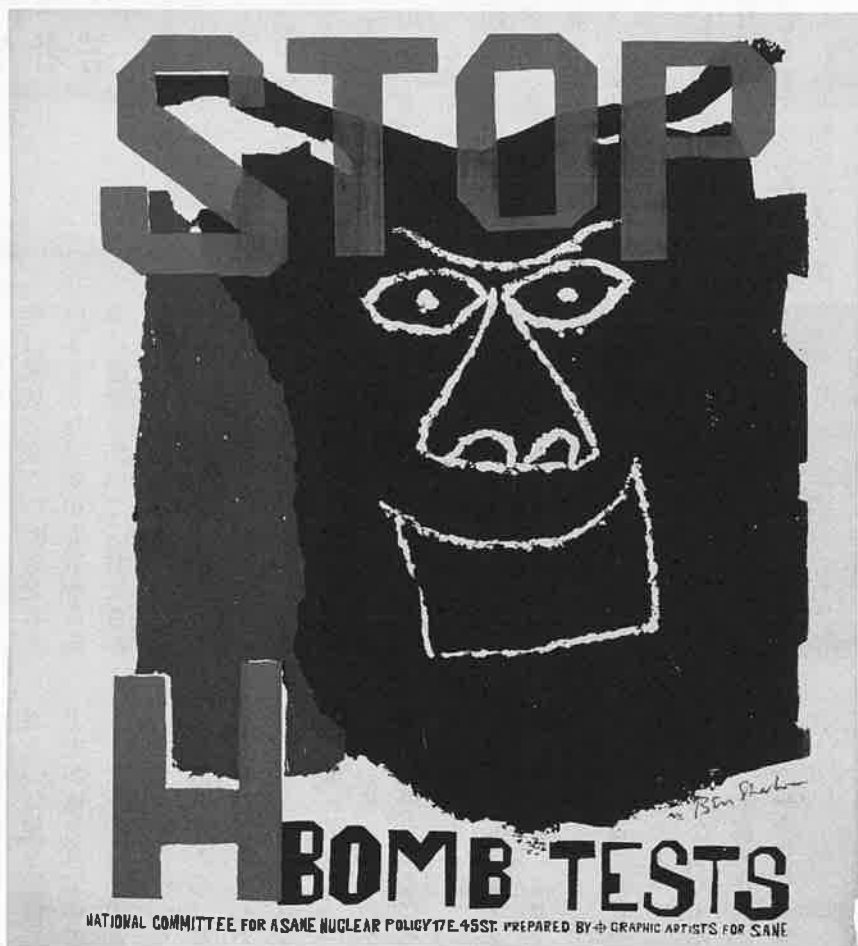
「第6回太平洋・島サミットに向けた有識者会合」懇親会が11月22日外務省飯倉公館で行われ、川崎昭一郎代表理事が参加しました。

太平洋・島サミットは、1997年の第1回から3年ごとに開かれ、第6回は2012年5月25-26日に沖縄県名護市で開催予定です。

当日は懇親会に先立って、上記有識者懇談会より外務大臣に対し提言が提出されました。懇親会の立食パーティーでは食材の一部として東北被災県のものが用いられました。島嶼国からの外交官等も見え、福島からフラガールが特別参加し踊りを披露しました。

協会役員懇談会開く

第五福竜丸平和協会は、12月20日に顧問・評議員・理事・監事による懇談会を開き、震災と原発事故のもとの展示館の活動、2012年の諸企画の検討、被災60年に向けての諸事業について意見交換しました。会には杉重彦、藤田秀雄、山村茂雄、吉田嘉清の各顧問をはじめ15人が出席しました。



水爆実験は止めよ！

アメリカを代表する現代画家ベン・シャーンのポスターを寄贈いただきました。シャーン（1898 - 1969）は、第五福竜丸の被ばく事件に題材にした「ラッキードラゴン」作品を約50点余り描きました。この作品は1960年代初めに全米の反核運動セインの依頼で制作されたものです。寄贈くださったのはアメリカ研究家の袖井林二郎さん（法政大学名誉教授）です。展示館では、当館所蔵の他のベン・シャーン作品と併せて展示方法を検討しています。

3・1ビキニ記念のつどい市民講座 ビキニ被ばく者 核を問う

<特別上映>

NHK 『大江健三郎・大石又七 核をめぐる対話』

(2011年7月3日放送)

◇上映後 元乗組員・大石又七語る

(聞き手) 永田浩三 (武蔵大学教授・元NHKプロデューサー)

◆2012年2月25日(土) 午後2時~5時

◆場所 夢の島マリーナ会議室

(新木場駅徒歩15分・夢の島公園内)

資料代500円

*展示館見学会・午後1時より

主催：第五福竜丸平和協会 協力：NHK